

『さくら貝の歌』

(1)

喜界島は、鹿児島から南に360km、島の周囲32kmの奄美大島の隣に位置する小さな隆起サンゴ礁の島である。隆起サンゴ礁とはサンゴ礁が地球の地殻変動によって押し上げられて出来る島で、現在も毎年2mm隆起しているそうで、このまま隆起が続くと200万年後には4000mになり、日本で一番高い島になる(!?)と島民は意気込んでいるとか(笑)。島の人口は現在7500人弱、年々島の人口は減っていく過疎の島となっている。産業はサトウキビ栽培を主体とする農業と漁業で、サトウキビを原料として黒糖焼酎の生産も行われている。

また、奄美大島にはハブが生息しているが、喜界島にはその島の成り立ちからハブは生息しておらず、野外に出て自然を満喫するには大変安全な島でもあるのだ。歴史的には、平安時代後期に僧都俊寛ら3人が平氏の滅亡を計った罪でこの地に島流しに会い、のちに他の二人は恩赦で島流しから解かれるのだが、俊寛一人はその首謀者ということで絶海の孤島にとどめ置かれ、絶望のうちにその生涯を終えたという悲話が語り継がれている。

太平洋戦争中には海軍の飛行場が建設され(現喜界空港)、大戦末期には、陸海軍の特攻機がこの地からも出撃して行った。飛行場の周りには、テンニンギクという、花卉の周辺が黄色で中心が朱色の美しい花の花園が広がっている。かつて最期の飛行に飛びたつ若き特攻隊員に対して、島の娘たちが心を込めて贈ったテンニンギクの花束の種子が落ち、そして芽生え、この地に繁殖して現在の花園になったそうで、島の人々はテンニンギクを“特攻花”と呼んで往時の若き特攻隊員たちの姿を偲んでいるそうである。

マサルがこの喜界島に1週間、島の全ての幼稚園・小学校・中学校・高校の学校歯科健診の依頼を受けて大学の医局から赴任したのは、1981年(昭和56年)5月のことだった。当時大学は人手不足で、新卒の歯科医師でも欠員さえあれば助手としての採用があり、マサルは指導教官の勧めのままに歯科保存学教室の助手として6月から採用が決まっていたので、無給医局員期間中のアルバイトとして喜界島の歯科検診に派遣されたのであった。喜界島には、当時助教授だったT先生より2つ下で、クラブの後輩のH先生が2代目の院長として歯科医院を経営しており、島には他に高齢の先生の歯科医院しかなく、学校検診は若手のH先生が一手に担っていたのだ。

たくさんの島民の歯科治療もしながら、全島の児童や生徒の歯科検診をすることは大変な労力だったために、歯科検診はアルバイトの先生にお願いしているとのことで、今回はマサルに白羽の矢が立てられたのである。歯科医師といっても、つい数か月までは学生の身分で歯科検診どころか歯科治療さえもろくにできない歯医者、一人で島の検診をしなくてはならない状況がどうだったのかを考えると空恐ろしいものがあったが、若さゆえの好奇心と無給医局員の生活の糧欲しさと、また何とかなるだろうとの楽観主義ゆえに、マサルは二つ返事でそのアルバイトの申し出を承諾し

たのだった。5月10日早朝に北九州を出発して、福岡空港から鹿児島空港にジェット機で飛びそこからプロペラ機のYS11に乗り継ぎ、奄美大島空港経由でマサルがかつての絶海の孤島“喜界島”の空港に降り立ったのは、その日の夕方のことだった。

天気は快晴、空港に出迎えに来ていたH先生と挨拶をかわし、小1時間かけてH先生はマイカーにマサルを乗せて島内を1周ドライブして、1週間投宿する喜界島の2階建てのビジネスホテルへと案内してくれた。『M先生、これから1週間宜しくお願いしますね。ハイ、これが先生にお貸しする車のキーです。検診には毎回診療所の女の子を一人アシスタントにつけるから、二人でその日の予定の学校へ行ってくださいね。目的地は女の子が全て教えてくれるから、先生は事故を起こさないように気を付けて運転して頂戴ね。明日、診療所に車を取りに来て、それから1週間は先生がその車を自分の車としてずっと使っていていいから…。』と別れを告げて、H先生はホテルからすぐの距離にある診療所兼自宅へと帰っていった。

マサルはフロントでホテルのキーを預かり、1週間投宿する部屋へと歩を進めた。「こんな小さな島にもホテルがあるんだ。観光ホテルじゃなくてビジネスホテルだから、仕事で泊まるビジネスマンも多いんだろうなあ…。」と思いつつも、人っ子一人いない感じの暗い廊下を歩き部屋のカギを開けた。小じんまりとした簡素な部屋には、必要最小限の物品しかなかった。「今日から1週間か…。テレビはあってもNHKと鹿児島放送くらいしか映らないみたいだし、ヒマつぶしに持ってきた渡辺淳一の“無影燈”上下2巻が役に立ちそうぞ…。」と独りごとを言いながら、部屋の窓を開けてみた。すると、そこにはコバルトブルーの外洋の広大な海が眼前に広がり、サンゴのかけらでできた白い砂浜には、エメラルドグリーンの波が打ち寄せては返し、返しては打ち寄せて、南国ムード満点の潮騒が心地よくマサルの耳に響いてきたのであった。「こんなに美しい海の近くにあるホテルに泊まるのは、生まれて初めてだ。1週間ヨロシクお願いいたしますよ…。」と誰に話しかけるでもないのだが、これから始まる1週間の暮しに対して大きな高揚感を覚えて、そんな言葉がマサルの口からはひとりでに出ていた。

『おはようございます！』。翌日マサルは指定された時間より早めにH先生の診療所へと顔を出した。『は～い、ようこそいらっしゃいました。家内の秋子です。昨晩は良く眠れましたか…？。驚いたでしょう、こんなに田舎のへんぴな島で…。』『…いいえ、そんなことはありませんよ。自然が豊かで海が綺麗で星空が綺麗で、素晴らしいところですね喜界島は。』『まあ、先生。そんなに気を遣わなくてもいいんですよ。それじゃ、主人呼んできますね。』とH先生の奥様は診療所の玄関から母屋の方に踵を返して戻って行った。

ほどなくしてH先生が姿を現し、診療所内にマサルを招き入れ診療所のスタッフを紹介した。『歯科衛生士のYさん、歯科助手のSさん、見習い技工士のA君。あとはもう引退してるんだけどオヤジが母屋に待機しています…といっても、毎日どこかにフラフラと出かけてるんだけどね。』3人のスタッフは明るい声で『どうぞヨロシクお願いいたします』と、マサルに挨拶をした。この瞬間マサルは雷に打たれたような衝撃が体を走った。「祐子、どうしてお前がここにいるのだ…！他人のそら似とは

いっても、ここまで完璧なそっくりさんはいないと思うのだが、本当に瓜二つだ！」。マサルは心の動揺を悟られまいと、『福岡県北九州市から来たMです。新米の歯医者でご迷惑をおかけするかもしれませんが、どうぞ宜しくお願いいたします！』と、大きな声で明るく振舞って挨拶を交わしていた。

初日の検診は歯科衛生士のYさんが同行してくれた。助手席にYさんを乗せて、午前中は近隣の小学校を2校回った。マサルが検診した結果をYさんが記録するのだ。初めの小学校では、慣れないせいもあって意外に時間を取ってしまい、2校目では併設されている幼稚園との連絡が不十分なために20分ほど空き時間が出来てしまった。マサルは1年前に鹿児島島の大学を卒業して島に戻ってきたという、自分とさして歳も変わらない若い養護教諭と話す時間が持てた。養護教諭は、島から出て行っても島に帰って来る若い人が少なく、学校には若い教諭が少ないのが悩みの種なんですよと、島の現状を話してくれた。Yさんは鹿児島島の短大を出て歯科衛生士の資格を取って故郷に戻っていたのだが、養護教諭の話に頷いていた。

午後は少し離れた小学校に検診に行った。生徒数が少なく複式学級だったが、生徒と先生が和気藹々としていて大変和やかなムードで、高学年の生徒たちが検診の準備の手伝いをしてくれたりと、大変アットホームな小学校だった。養護教諭も大変優しく穏やかな方で好感が持てた。最初の小学校も、新任の若い知的な女性の養護教諭が迎えてくれたために、マサルのこの島に対する印象は大変良いものになっていた。

次の日は、それまでの晴天から一転して一日中シトシトと雨が降り続いた。午前中に3校の小学校を回った。3校目の滝川小学校は幼稚園児も合わせて26名という全く絵に描いたような可愛らしい小学校だった。泉の湧く山間にあるこの小学校は、この島でも規模が一番小さな小学校で、本当に小じんまりした校舎には、まるで先生と生徒が家族のように一体となって生活をしているように思えた。マサルはこの小学校に居心地の良さを感じるとともに、このような小さな島の末端の学校まで行き届いている日本の義務教育の素晴らしさと尊さを、ヒシヒシと感じていた。

午後からは一転して全校生徒数が500人の中学校の検診を行った。半数は事前にH先生が検診を終えていたので、残り250名をマサルが検診することになったのだが、中学生ともなれば永久歯列が生えそろうている生徒が多く、小学生の混合歯列よりもはるかに検診しやすいとマサルは思った。しかし、検診用のライトもなく窓辺の明るいところで、歯鏡1本のみで検診をするだけなので、果たしてどれだけ正確に検診が出来ているのか、マサルには全く自信がなかった。しかし、とにかく形の上では3時間余りかけて検診を終了して、ぐったりと疲れ切ってYさんと共に診療所へと帰って行った。まだ検診2日目というのに、無理な姿勢を長時間強いられるので、首筋は痛くなるは肩は凝るはで疲労はピークに達し、ホテルで夕食を取ったあとは汗を流してバタンキューとなっていた。まだまだこれからが本番というのに…。

(2)

3日目は、午前中157名の小学生と幼稚園児を検診したあと、午後の検診の同行者がSさんに代わった。マサルの心はにわかにときめいた。初日の挨拶で雷に打たれたような衝撃を受けた、マサルが4年間付き合ってた別れた初恋の人“祐子”に顔と体つきがまるでそっくりのSさんが同行者となったのだった。同郷の一つ年下の祐子とは、東京と北九州という遠距離恋愛だったのだが、マサルは結婚しても良いというくらいの真剣な気持ちで付き合っていた。しかし、その姿勢が彼女にとっては次第に重荷に思えるようになってきたのか、彼女の方からマサルに対して疎遠になってきて、祐子が大学を卒業して東京で就職後は、連絡をとる回数もめっきり減ってしまい、二人の仲は自然に消滅してしまったのだった。喧嘩別れをした訳ではなかっただけに、マサルにとっては辛く苦しく悲しい失恋の経験となり、祐子に対しての未練はまだまだたっぷり残っていた。そんな矢先のSさんとの出逢いなのである。若いマサルの心がときめかないはずはなかった。

『Sさん、午後からヨロシクお願いしますね。まだまだ検診は半ばだから頑張らないといけませんね。』『こちらこそヨロシクお願いしますね。私、Yさんのようにさばけてないので、先生の足手まどいにならないように頑張りますので、ホントにヨロシクお願いいたします。』『ボクだって新米のペーパーの歯医者なんで、果たしてきちんと検診できているか、全然自信は無いんですよ。貴女と同じようなもんです。』と、マサルはSさんの緊張をほぐすように笑いながら話しかけた。マサルは、H歯科医院に来てまだ1年しか経っていないというSさんに話しかけるたびに、愁いを帯びた大きなつぶらな瞳とキリリと通った鼻筋の美しい横顔に、祐子の面影を重ねていた。初対面なのにSさんに対して親愛の情が沸々と湧いてきた。

マサルの心情を知る由もないSさんは、この島に比べればはるかに都会の町からやって来た青年歯科医師に対しての気おくれもあってか、初めのうちは会話も控えめな様子であったが、マサルが親愛の情を持って色々話しかけてくるので、次第に心を開いてくれるようになってきた。午後の検診の小学校は、車で数十分の距離の島のはずれの小学校だったが、人数も少なく検診そのものは比較的楽だったので、敢えてH先生はSさんに経験を積ませるために同行させたのであろうとマサルは思った。その日の検診の予定はそれだけだったので、帰りに二人は時間が十分あったので、Sさんの案内で島の中央を走る道路を使い、眺望の大変良い百之台公園展望台という場所で車を停めて喜界島一の眺望を楽しんだ。ここは島の中央部に広がる標高203m、広さ700haの広大な隆起サンゴ礁の高台地で、眼下にはエメラルドグリーンに輝く太平洋と東シナ海が一望できる絶景の地であった。周囲には真っ赤なハイビスカスが咲き乱れて、まさに南海の楽園のようだった。しばしの間マサルは海風に吹かれながらSさんとその眺望を楽しんだ。まるで潮風に黒髪をサラサラとなびかしている祐子が隣に寄り添っているような錯覚にマサルは陥っていた。

『Sさん、突然だけど“赤い糸の伝説”って聞いたことがありますか…？。高校時代の英作文の問題で、日本語から英語に赤い糸の伝説を思春期の兄弟が話している場面を和文英訳する箇所があっ

て、その時ボクは初めて赤い糸の伝説の話を知ったんです。自分の足の小指から目に見えない赤い糸がスルスルとのびていて、その糸はこの世の中にいるたった一人の女の人の足の小指に結ばれている。そして、その糸をたどっていけば、いつかはその女の人に巡り合い結ばれるという話なんだけど…。その話を讀んだとき、何だか妙に心がザワザワしてきて、いったいその女の人是谁なんだろうかと夢想していた時代があったんです。その後、大学生になって同じ中学の一つ下の憧れの後輩と付き合うようになって、きっとこの女性がボクの“赤い糸の人”だと思って4年間付き合ったんだけど、結局上手くいかなくなって別れてしまったんです。』とマサルはSさんに対して、自分の今の心情を伝えるために、やや強引ともいえる突拍子もない話題を切り出したのである。Sさんは、突然のマサルの失恋の話を聞かされても、どう相槌を打っていいのか少し困惑した顔になり、口を閉ざしてしまった。

焦ったマサルは、『ごめんなさいね、ボクの失恋話なんか聞かされてもちっとも楽しくはありませんよね。どうしてこんな話をしたかっていうと、実は、貴女がボクの初恋の女性と瓜二つなほど姿形が似ていて、ホントにビックリしたんです、初対面の時に。世の中にこんなにも似ている人がいるのかと思って…。』Sさんは、『そうだったんですか、それで先生は初めから私に対して、初対面とは思えないほどに、とっても親しみを持たれて話しかけてくださったんですね…。そんなに似ていらしたんですか、でも中身は違っていただけでしょ…。』と納得して、微笑みながらうなずいてくれた。『姿形が似ているということは声も似てくるんですよ、音声はその人の頭蓋骨の骨格や筋肉によって作られるから、Sさんの声はとってもよく似ているんです。もちろん性格まで一緒ということはないのですが…。でも、ボクが想像していたとおり、Sさんは穏やかで優しい性格ですね…。』と、マサルはSさんに全面的な好意を押し出して話を続けたが、それ以上は失恋した彼女についての話題は避けて、Sさんの境遇に話題を向けることにした。

『Sさんはずっとこの島に住んでいるんですか…？』『…いいえ、高校を卒業して鹿児島島の短大に進学したんです。鹿児島で就職して7年間ばかり鹿児島にいましたが、色々あってまたこちらに帰ってきてしまいました。やっぱり、この島が一番暮らしやすいのかな…と思ってるんですよ。』と、Sさんは少し言葉を濁しながら鹿児島での生活をマサルに語ってくれた。そして、『先生、今日の夕食後スタッフのみんなと夕日の散歩道を歩きませんか…。荒木・中里遊歩道といって海に沈む夕日が見える喜界島一の最高の夕日スポットなんですよ。喜界島に来た人には、是非紹介したい場所なんです。先生にも是非紹介したいです。お時間取れますか…。』『ええ！？、いいんですか。仕事は終わっている時間なのに。』『全然平気ですよ、私たち夜はみんないつもとってもヒマなんです…(笑)。』『アリガトウございます。それじゃあ、是非お言葉に甘えさせていただきます。夕方7時にH歯科医院の前に集合ですね。』マサルは、思いもかけなかったSさんからの誘いに有頂天になって、雄大な眺めに満足しきってH歯科医院へと車を走らせた。

“夕日の散歩道”、荒木・中里遊歩道は、診療所から車で約10分の距離にあり、サンゴ礁の海岸線の中に作られた遊歩道で、途中の数か所には海にせり出した展望台があり、海に沈む夕日の最高のビューポイントとなっていた。海岸線には鮮やかな緑色の肉厚の葉っぱをたくさん茂らせた低木も自

生しており、オカヤドカリの群れが海から陸の茂みへと移動している光景も目にすることができた。H先生の3歳の長男もSさんに手を引かれてやって来て、YさんとA君と5人で和気藹々と夕暮れの遊歩道を散歩した。『ここは素晴らしい場所ですね。綺麗に整備されていて安全で歩きやすく、サンゴ礁と海とのコラボレーションが最高に素敵ですね、怖いハブもここには一匹もいないと聞いているし…。』マサルはあまりの自然の大きさと美しさに感動して、持ってきたカメラで夕日をバックにストロボを光らせて5人の記念写真を撮影した。天気は良かったのだが、あいにく夕日が沈む方向の海面には雲が出ており、夕日はゆっくりゆっくりとオレンジ色の光を輝かせながら、海上の雲の中に沈んでいった。そして、穏やかな南国の夜が訪れようとしていた。『先生、少し残念でしたね。今度いらっしゃるときには、きっと海に沈む綺麗な夕日が見られるといいですね…。』と言って、みんなはマサルを慰めてくれた。

駐車場まで帰る道すがら、暮れなずむ遊歩道を歩きながら、マサルは前を歩く3人と少し距離を置いて、意を決して『今日是一日、本当に楽しかったです。夕方までお付き合いいただいて、本当にありがとうございました。もし良かったら、明日の夕方も今度は二人きりでドライブをしませんか…。道は案内していただかないと判りませんが…。』とSさんに囁きかけた。Sさんは少し伏し目になって、『先生、ありがとうございます、お誘いいただきまして。でも、私は両親と一緒に暮らしていますので、夕方から一人で外出することはできません。誤解しないでくださいね、先生が嫌いとかいう訳じゃないんですよ。両親がそういう事にとっても厳しい人たちなので…。先生のそのお気持ちは本当に嬉しいです。』と、マサルの誘いを丁重に断ってきた。『すみません、無理な願いをしてみました…。忘れてくださいね、今のお話。』と、マサルはぱつが悪そうにお詫びをして、そのあとは何事もなかったように二人はみんなと合流した。

その夜、マサルはホテルに戻りホテルのバルコニーから満天の星空を眺めながら、楽しかった今日一日を思い出していた。「運命のいたずらという訳ではないが、他人のそら似にしては、余りに似過ぎていた。同一人物ではないかと思ってしまうほど祐子とSさんは似ていた。世の中には自分とほとんどそっくりな人間が2~3人は必ずいるという話をどこかで聞いたことがあったが、その話をオレは信じることにしよう…。百之台公園でのSさんと色々話したひとは本当に楽しかったな。夕日の散歩道からの海に沈む夕日もとっても綺麗だったな。だけど、調子に乗って最後にSさんにあんな事を言わなければよかった…。明日から、どんな顔をしてSさんと顔を合わせればいいのか…。』と、酔いが回るにつれて、マサルは後悔の念がどんどん押し寄せてきて、なかなか眠れない夜を過ごすことになったのであった。

(3)

『おはようございます！』と、マサルは何時ものように元気にH歯科医院の玄関から中に入って朝の挨拶をした。『おはようございます、昨日は楽しかったですね。』と、スタッフのみんなは明るく挨拶を返してくれた。勿論Sさんにもこやかな笑顔でマサルに挨拶をかわしてくれた。「ああ、ヨカット。S

さんがボクを避けたらどうしようと思ったけれど、大丈夫みたいだな…。マサルは心の中で安堵するとともに、今日の検診へと出かけることとなった。

五月晴れの4日目は、マサルひとりで喜界高校へゆき、高校生520名を一日がかりで検診することになっていた。ここでは養護教諭が検診結果を記録してくれることになっていたのだから、場所も大通りに面して判りやすい場所にあったため、マサルひとりで赴いたのであった。今回の検診の最大のヤマ場となった。朝9時から始めて昼間に1時間の休憩をはさみ、午後4時30分までの検診時間6時間30分にわたるマサルにとっては前代未聞の集団検診だった。言葉も出ない程の疲労感があったが、最後の一人が終わったときの達成感たるや、これも言葉に出せない程のものがあった。その日の夕方は、医局の先輩たちや、実習担当の衛生学院生たちにあげる土産を、土産物屋で購入してホテルへ戻った。5日目は曇り空となり、同行者もYさんに戻った。午前中は小学生8クラス320名、午後は中学生312名の検診となったが、昨日の超人的な洗礼のお蔭で、4日目以上の人数を検診したのだが、5日目はそんなにきついとは感じなくなっていた。慣れとは恐ろしいものだ…。

その日からマサルは風邪気味になり、風邪薬を服用しながらの検診であったが、気持ちが張り詰めているせいかもしれないが6日目の土曜の検診も無事にこなして、午後の飛行機で喜界島に別れを告げて福岡に帰ることになっていた。「Sさんとも今日でお別れなんだなあ…。ちょっと寂しいなあ…。」とマサルは心の片隅に思いながらH先生宅で昼食をご馳走になった。外は朝から雨。どんよりとした雲が空を覆っていたので、『ひょっとしたら今日は飛行機が飛ばないかも知れないね。こんな日は欠航になることも多々あるんですよ。そのときは先生、諦めてもう一泊ホテルに泊まって明日帰ってね。』と、H先生はこともなげに話した。「エエッ、オレ今日は帰れなくなるの…。」嬉しいような怖いような妙な感覚に突然襲われた。「そうか、ここは離島なんだ。自分が住んでいる九州とは違って、天候によっては孤立することもあるってことだよ…。」マサルは納得して、自分の置かれている状況を素直に受け入れることにした。結果は喜界島の天候は回復したが鹿児島島の天候が悪いために今日の午後の便は欠航となり、結局マサルはもう一日この島に滞在することになった。欠航が早く判ったために、スタッフのみんなは午後からマサルを島の観光案内に連れて行ってくれることになった。A君のマイカーに4人で乗り、観光名所めぐりが始まった。マサルの心はその日の天候とは裏腹に急に明るくなっていった。

A君は自慢のシルバーのスポーツタイプのクーペで島内を案内してくれた。マサルの滞在期間延長で、かえって4人の若者が一緒にドライブ出来ることを楽しんでいるような雰囲気もあったし、遠来のお客に対して喜界島の素晴らしいところを紹介できるという喜びもあったのか、始終にこやかにハンドルを握っていた。YさんとSさんは後部座席に座り、助手席に座るマサルにシート越しに身を乗り出して、ここは〇〇、あそこは〇〇と、丁寧に説明してくれた。僧都俊寛の墓が建立されている史跡や、雁股の泉では車から降りて周囲を散策した。「雁股の泉」とは、「保元の乱(1156年)で敗れた源為朝が琉球に渡ろうとした途中に、しけに合い喜界島沖にたどり着き、船上から島を目掛けて雁股の矢を放ち、上陸後その矢を抜いた跡より清水が湧きあがり泉となった。」と、古めかしい案内板

に記されていた。

『先生、“雁股の矢”って、どんな矢なんですか…？』とSさんが質問してきた。マサルが弓道をしていることを聞かされていたので尋ねてきたようだった。『雁股とは、矢の先端につける鏃(やじり)が二股に分かれた鋭い刃先の金属で出来ている矢のことで、飛んでいる鳥や走っている獣の足を射切るのに使われた矢のことなんだ。ボク達が使っている競技用の矢は先端が丸くなっていて、的を貫通しやすくなっているけれど、本来弓矢は狩りをしたり戦いで相手を傷つけるために使われていた道具だから、使用用途によって色々な形の鏃があったんです。』と、ちょっと得意げに解説をすると、みんなは一緒に『へ〜』と声をあげて感心していた。

島の東のはずれの志戸桶海岸では、3日前の夕方に訪れた西のはずれのサンゴ礁の海岸線“夕日の散歩道”とは打って変わって、真っ白な砂浜が広がる素晴らしい海岸だった。若者たち4人ははしゃみの間砂浜に降りて、打ち寄せる波と追いかけてっこをしたりしてはしゃぎまわった。綺麗な南国の貝殻が波に洗われて、きめ細やかな白い砂の間からたくさん顔を出していた。美しい貝殻ばかりだった。ひとしきりはしゃいだあと、4人は名残惜しかったが夕食の時間も迫っていたので、砂浜を後にして最後のドライブを楽しむことにした。Sさんだけみんなより少し遅れて浜辺からあがってきた。

H歯科医院に到着してみんなとの別れ際に、『明日は、島内の野球大会があって、H先生も選手として出場するんですよ。私の兄もH先生と一緒にチームなんで、お弁当を持って応援に行きますが、時間があるようだったら先生もよろしければ野球大会を見に来られませんか…？』と、Sさんがマサルに話しかけてきた。『その話、今日のお昼にH先生の奥様からボクも聞きました。帰りの飛行機の時間が午後3時なので、それまでの時間一緒にお弁当を持って野球大会の応援に行きませんかと誘われていたので、ボクも応援に行くことになっているんです。明日の応援楽しみにしていますね。』マサルは、これでいよいよSさんともお別れになるのかと思っていた矢先に、明日も会えることが判って、風邪をひいていたことも忘れて再び元気になってきたのだった。

島に到着して8日目の日曜日は、雲一つない快晴で絶好の草野球日和となった。マサルは、H先生の奥さんと子供さん二人を連れて、バスケットにお弁当や飲み物やお菓子たくさん詰め込んで、敷物を持って喜界高校のグラウンドへと軽貨物で向かった。島内ではタクシーの数が大変少ないので、住民はチョットした距離なら軽貨物で移動するらしいのだ。軽貨物とは本来ならばワゴンタイプの荷物を運ぶ軽乗用車なんだが、荷室のほかに座席もあってそこに人が乗ることが出来るようになっており、島内独自の交通ルールがあるらしいのだ。

グラウンドではすでにH先生の出場した第1試合は終了しており、残念なことに先生のチームは負けていた。Sさんと初日に検診した小学校の若い養護教諭と一緒に応援をしており、『先生、第1試合はホントに残念でしたね。でも第3試合がまだ残っていますので、頑張って応援しましょうね！』と、Sさんは快活に笑顔でマサルに話しかけてきた。途中昼食をはさんで第3試合が始まったが、この試合も接戦の末にH先生のチームは敗退して、肩を落としてH先生は汗を拭き拭き応援席に戻ってきた。『いや〜あ、今日は散々な結果になってしまいました。せつかく先生にも応援に来てもらったのに、申し訳ない。AリーグとBリーグの入れ替え戦に出ないといけなくなりましたが、次は頑張りますよ！』と、H

先生は日焼けした精悍な顔で決意を新たにしている様子だった。

マサルは先程まで一緒に応援していたのだが、今は木陰に座ってこちらに視線を向けていたSさんに、最後のお別れを告げるために近付いて行った。Sさんの瞳の色が少し翳っていることをマサルは感じていた。『Sさん、歯科検診はホントに大変だったけど、ボクは楽しい思い出がたくさん出来て、喜界島に来てホントに良かったと思っています。』『私もですよ、先生と過ごした1週間はアツと言う間でしたね。本当に楽しかったです。これ、私から先生へのプレゼントです。恥ずかしいので、帰りの飛行機の中で見てくださいね。』と、Sさんは少しはにかみながら水色の小ぶりの封筒をマサルに差し出した。『へ～、何が入ってるのかな…。楽しみですね。』『絶対に飛行機に乗ってから開けてくださいよ。』Sさんは笑顔でマサルに念を押し、右手を差し伸べてマサルに握手を求めてきた。マサルも右手を差し出し、初めてSさんの温かい手に触れることが出来て心が弾むとともに、別れの悲しみがジーンと伝わってきた。マサルは『それじゃ、Sさん元気で頑張ってくださいね。』と笑顔のまま踵を返して、今度はH先生の運転する車で先生の家族と共にH歯科医院へと帰って行った。振り返ると、Sさんは手を振りながら最後までマサルを見送ってくれていた。

(4)

喜界空港から鹿児島行き直行便にマサルは乗り込み、指定された座席に着座した。シートベルトを着用してしばらくすると、プロペラを回すエンジン音がさらに高音になって室内に響き渡るとともに、窓の外に見える両翼のプロペラの回転数が一層勢いを増して機体が動き始めた。振動もさらに増してビーンビーンとけたたましい音を立て始め、窓の景色が次々に走り始めたかと思うと、機体は急にフワッと空へ舞い上がって行った。ジェット機のそれとは比較にならないくらいの短い距離でYS 11は離陸していったのである。機体は喜界島の上空を一周して機首を北へ向けて飛行を続けた。

機体が島の上空を旋回したときに、百之台公園や夕日の散歩道や志戸桶海岸が、思い出のモザイク画のようにマサルの視界に飛び込んできた。そして、次第にマサルの視界から遠ざかって行った。マサルは懐かしの珠玉の島に別れを告げて、Sさんからもらった水色の封筒の中身を広げてみた。封筒からは、真綿に包まれたうす薄紅色をした“さくら貝”の貝殻が二つと、白い便せんに黒いインクで書かれたSさんの手紙が添えられていた。

『 M先生へ

とうとうお別れの日が来ましたね。本当なら昨夕先生とお別れをするときに、手紙と一緒に手渡そうと思っていた私からのささやかなプレゼントです。さくら貝、私の大好きな貝です。小さな貝ですが、思いを込めて昨日の砂浜で見つけて来ました。

先生と初めてお会いしたときに、実は私も身体の中に電気が走ったようなときめきを覚えたんです。こんな気持ちになったのは初めてでした。きっと、先生が私と初めて会ったときに、雷に打たれ

たような心の衝撃を覚えたという話をあとで話して下さいましたが、先生の魂の震え・衝撃が私にまで伝わって来たため、私も心が震えて電気が走ったような感覚を覚えたんでしょうね。でも、私だって、そんなこと初対面の先生に言える訳がありません。人間の出逢いとは、本当に不思議なものですね。

百之台公園で先生が私に話してくれた、別れた彼女と私がそっくりさんだったという話も、本当にビックリして、世の中にそのような不思議な話があるのだなあと、他人事のようにして聞いていましたが、先生にとってはそれどころの話ではなかったんですね。夕日の散歩道での先生からのお誘い、本当に私は嬉しかったです。先生の正直な気持ちが伝わってきて、なんてこの方は心が真っ直ぐな方なんだろうと思いました。先生が私の鹿児島での生活を尋ねられたときに、何だか私は歯切れの悪い言葉を並べて正直に話していないことがありました。先生には知らせる必要のないことなのだと思って今まで黙っていましたが、先生がもし私に何かを期待してこのまま北九州に帰って行かれたのなら、私は先生の心を欺いてしまうのではないかと思いこの手紙を先生に書いたのです。今まで黙っていて、どうかお許してください。

実は私は結婚に失敗して、1年前に生まれ故郷のこの島に帰ってきました。私の身を案じた遠い親戚のH先生が、歯科助手として私に働き口を用意してくださったのでした。先生から、私の鹿児島での生活を聞かれたときに正直に言えばよかったのですが、先生から優しくされるにつれて、前途洋々とした未来が開けている独身の先生に対して、どうして結婚に失敗して故郷へ帰ってきたバツイチ女が心を寄せられるというのでしょうか…。

野球大会の応援に来ていた養護教諭のKさんは、私の高校時代からの親友です。私は鹿児島市内の短大に進学して、そのまま市内の会社にOLとして就職して数年後に、取引先の会社の社長の御曹司に見初められて結婚しました。しかし、楽しかった新婚生活も束の間で、二人の間に中々子供が出来なかったことや、夫の会社の倒産が重なり二人の間がぎくしゃくしだして、夫もそれが原因なのかどうか分かりませんが、次第に家に帰らなくなりました。そして終いには夫の方から、お前との生活に疲れたので別れてくれないかと一方的に切り出されたのです。私は迷いました。愛情で繋がっていたと思っていた夫との夫婦関係が、経済的な破たんによっていとも簡単に崩れてゆくものなのか…。夫婦関係って、そんなに簡単に解消していいものなんだろうか、もっと二人で努力して築き上げてゆくものなんじゃないだろうか…。貧しくなればなったで、これからの生活を二人で開拓すればいいじゃないの。

しかし夫は御曹司として大切に甘やかされて育ってきたせいか、忍耐力や我慢強さが根本的に欠如していたのかも知れません。私のもとを去って、新しく見つけた若い恋人との生活を始めるようになりました。新しい恋人とともに、新しい仕事でも始める積りなのでしょう。でも、本当にやって行けるのでしょうか…。そういった夫の人生観に私は失望して、私は離婚を決意して鹿児島で歯科助手の免許を取って、H先生のお世話になる事にしました。

私の方が先生よりもきっと年上ですね。いけませんね、先生の優しさに甘えてしまい、こんな私の身の上話をしてしまいました。先生のような優しいお人柄なら、きっと必ず先生を大切に思っただ

さる女性がたくさん現れますよ。私も、先生のことは一生忘れませんので、もしもよろしければ先生も時々“さくら貝”を眺めては、喜界島に住む私のことを思い出していただければ嬉しいです。

最後に“さくら貝の歌”を記して、先生の好意に対する感謝とお礼の言葉とさせていただきますね。因みに、この歌は故郷に残してきた恋人の早逝を知った作者が、追悼の思いを込めて作った唄だそうです。

さくら貝の歌

美はしき さくら貝ひとつ
去りゆける 君にささげん
この貝は 去年(こそ)の浜辺に
われ一人 ひろいし貝よ

ほのぼのと うす紅染むるは
わが燃ゆる さみし血潮よ
はろばると かよう香は
君恋うる 胸のさざ波

ああなれど 我が想いははかなく
うつし世の なぎさに果てぬ

さようなら
Sより 』

マサルは、思いもかけなかったSさんの告白の手紙に、読み進めて行くうちに涙がポロポロと溢れてきた。知らなかったとはいえ、Sさんの背負ってきた辛い過去の人生に思いを馳せるとともに、Sさんの優しさと逞しさと思いやりの深さ、H先生家族の優しさや情けの深さを感じていた。好きだとか嫌いだとかわべだけの感情ではない、もっと人間としての深い絆や、温かな思いやりを大切にしている人々の存在を知って、自分自身を恥ずかしく思っていた。「すまなかったSさん。ボクは勝手に自分自身の世界に酔いしれて貴女に好意を寄せていたのに、貴女はボクのことをそんなに深く優しい眼差しで見つめていたんですね。本当にありがとう、これからは自分をもっともっと磨いていかななくてはいけない…。」マサルは祐子との別れに心の区切りをつける決心をすると共に、再び窓に顔を近付けて、今はもう完全に視界から消えてしまったその島の空を、しばらくの間じっと見つめていた。

おしまい

AKIRA MIURA

2014年10月